

薬売りの少年

小川未明

青空文庫

にもつ 荷物せなかを背中に負おつて、薬くすり売りの少しょう年ねんは、今日きょうも知しらぬ他た
こくの道みちを歩あるいていました。北きたの町まちから出でた行ぎょう商しょう群ぐんの一人ひとりで
 あつたのです。

しもど霜解しもどけのした道みちは、ぬかるみのところもあるが、もう日ひの光ひかりに
 乾かわいて、陽かげろう炎のぼの上のぼつているところもありました。村むらはずれに土ど
て手てがあつて、大おおきな木きが立たつていました。かさのように枝えだを空そらへ
ひろ拡ひろげていました。

「なんの木きだろうな。」

少しょう年ねんは、よくこうした景けしき色みを見るみのです。ゆくところ、ど
おなこにも同おなじような村むらがあり、人ひとが住すんで、笑わらつたり、怒おこつたりし

ていると思うと、なんとなくこのあたりの風景を見てもなつかしいのでした。そしてここにはもう春がきていて、木の下には、青い草が芽ぐみ、紫色のすみれの花さえ咲いているのが、目の中に入ったのです。

少年は思わず、故郷の方を振り返りました。青空遠く雲は流れていて、もとよりその方角すらたしかでなかつたが、曇り日がつづき、冷たい雪が降っていることと思われました。彼は、青草の上へ腰をおろそうとしたが、そばに小さな茶店があるのに気づいたので、さっそく入って腰掛けへ休みました。「いらつしやいます。」と、おかみさんが、愛想よくお茶を注いでくれました。

「この村へ、薬屋がやってきますか。」と、少年は、たずねたのであります。

「あなたは、お薬屋さんですね？」と、おかみさんは、少年を見ました。

「そうです。どんな薬でも持っています。今年置いてゆきまして、来年またまいりましたときに、お使いになった薬のお代をいただくのですが、どうか、ここへも一つ置かしてくださいませんか。」と、薬売りの少年は、頼みました。少年は、おかみさんが、どういふだろうかと心配しながら返答を待ちました。

「よろしうございますよ。このへんは、町へ出るには遠いし、

お医者さまもいない、まことに不便なところですから、万一の場合に困ってしまいます。私の家ばかりでなく、きつと喜ぶ家がありますから、このへんをお歩きになつてごらん下さい。」と、おかみさんは、しんせつにいつてくれました。少年は、いいところへきたと思つて、たいそう喜びました。

「こちらは、暖かですのでございますね。」

少年の目には、おかみさんから、やさしい言葉を受けたので、土地までが、和やかな慕わしいものに感じられたのでした。

「気候はいいが、さびしいところですよ。」

行商人は、かえつて汽車などの通らないところ、町のな
いところ、不便なところほど、得意を造るのに都合がいいとされ

ていましたので、少年とて、不便やさびしいということは、
 覚悟でありました。ただ、こうして歩いていて、ありがたくも、
 うれしくも、また悲しくもしみじみと感ずるのは、人の情けであ
 ると思いました。

少年は、その茶店から出て、おかみさんに教えられた道
 の方へ、荷を負つて、とぼとぼと歩みをつづけたのです。

松原へつづいている小道で、一人の少女がしきりに下を
 向いて、なにかさがしていました。

「この松原の奥にもお家がありますか？」といつて、薬売り
 の少年は、たずねたのです。女の子は、両手についた砂を
 はらつて、少年の顔を見ました。

「ええ、ずっと奥の、がけの上に一軒家があつてよ。」といいま
した。

「一軒きりですか？」

「ええ、一軒だけ、そして、たった一人だけ住んでいるの。」

「一人だけですか……。」

「先生が一人住んでいるの、変わった人なの。」

「どんなに変わっていますか？」

「そうね、よく知らないわ。おもしろい人ね。」

少女は、笑つて、こう答えると、また下を向いて、なにか

草をさがしていました。

「嫁菜をつんでいるのですか？」と、少年は、道ばたの青い

草を見ました。

「いいえ、おんばこをさがしているの。」と、少女は、答えたのです。

「おんばこをさがして、なんになさるのですか。」と、少年は、ききました。

「せきのお薬にするのよ。兄さんが、せきをしてなおらないのですもの。」

「ああ、せきの薬ですか、せきのお薬なら、私^{わたし}がたいへんきくよい薬を持っています。」と、少年は、いいました。すると、少女は、驚いたふうで、少年をながめました。

「あんた、お薬屋さん？」

「ええ、わたしは、薬屋ですよ。いい薬を持っています。あなたの家はどこですか？」と、少年は、いったのであります。

「おじいさんに聞いてみるわ。私の家はあすこなのよ。」と、少女は、先になって、小道を走っていきました。薬売りの少年は、すこしおかれて従っていくと、

「おじいさん、お薬屋さんをつれてきた。」と、いう声がきこえたのでした。その家の周囲は、桃の木の本林になっていました。鶏小舎があつて、鶏がのどかな声でなっていました。おじいさんの前へいつてあいさつすると、

「年の若い薬屋さんだな、いくつになるかな。おお、うちの孫より五つは多いが、感心なこつた。孫もその年になったら、独

りで船ふねに乗のつて、父親ちちおやのいるハワイへいくことができるだろう。
 孫まごも、かぜをひいて、せきがなかなかしつこくて困こまっているが、
 よくきく薬くすりがあつたらもらつて、すぐ飲のましましょう。」と、お
 じいさんは、かわいい孫まごのことで、心こころがいつぱいだったのです。
 薬くすり売うりの少しょう年ねんは、荷にを下おろして、薬くすりを出だす間まにも、自じ分ぶん
 にもこんなやさしいおじいさんがあつたらば、と思おもわれるのでし
 た。

「このお薬くすりをあけてください。せきによくききますから。」
 この声こゑをききつけて、臥ねている男おとこの子こは、
 「ありがとうございました。」と、薬くすり売うりの少しょう年ねんの方ほうを向むいて、お礼れいを
 いたしました。まくらもとの壁かべには父親ちちおやがいつている、ハワイの

風景の写真が貼られています。

「坊ちゃん、早くなおつてください。」と、少年がいました。

「また、来年きてください。僕、待っているから。」と、臥ている、男の子がいました。

「きつと、まいますよ。」

少年は、振り返つて、あいさつしながら、出ていくと、後ろ姿を少女とおじいさんが見送つていて、

「気をつけて。」と、おじいさんが、いつてくれました。

少年が、がけの上にあるという、一軒家をたずねていたのであります。それが、自分の職業であるうえは、たとえ一

軒けんといつても捨すててしまふわけにはいきませんでした。小ちいさな門もんがあつて、開あけると、二、三人にんの子こ供どもが花壇かだんのところ、遊あそんでいました。南みなみの海うみから吹ふく風かぜが暖あたたが咲さき、すいせんや、フリージアなどが咲さいていました。

「だれかきた。」と、一ひとり人ひとの子こ供どもが、いきました。

「いま、先せん生せいは、お留る守すですよ。」と、他たの子こ供どもが、少しょう年ねんを見みていいました。

「葉くすり売りですが、お留る守すですか。」と、少しょう年ねんは、いつて、恍こう惚こつとして、かなたに輝かがく青あおい海うみをながめたのです。

「カナリヤにやる、はこべを採とりにいらしたのだからすぐお帰かえりになるわ。」と、女おんなの子こがいました。

「いい景色ですね。」と、思わず口に出して、薬売りの少年は、がけつ鼻の方へ歩きました。

「この家は、あぶないのだよ。先生は、変人だから、人の住まない家に住んでいるのだ。」と、一人の子供が、いいました。薬売りの少年は、おんぼこを摘んでいた少女が、いった言葉を思い出したのです。

「どうして、変人なんですか？」

「だって、がんこなんだもの、人があぶないといっても平気であるからさ。けれど、先生は、僕たち子供だけはかわいがってくれるよ。」

「いい人ではありませんか？」

「それは、いい人さ。けれど、大風が吹いたり、地震があつたりしたら、この家は、がけがくずれてひっくり返るかもしれない。そうすれば、僕たち安心して、本を習うこともできないだろう。」と、子供が、いいました。

薬売りの少年は、下を見るとはるかに波が岩に碎け、日の光が射して、美しい虹を描いています。なるほど、がけの下で、土は削り落とされて、五色に彩られた潮の匂う海が迫っていました。汽船がいくとみえて水平線に、一抹の煙が上り、沖の小島には、夜になると煌々として光を放つ燈台が、白い塔のようにかすんでいます。

「あれは、燈台ですか？」

「そうだよ、あの燈台とうだいの明あかりは、先生せんせいのお家うちの座敷ざしきへ入はいるのだよ。」

「坊ぼっちゃんたちは、日本海にほんかいの冬ふゆの海うみを知らしないでしょう。それは、すごいですよ。」と、薬売くすりうりの少年しょうねんがいました。

「そうかい、そんなにすごいかい。けれど、台風たいふうがくるのは、たいいていあちらの南みなみの方ほうからだぜ。そのときは、大おおきな風かぜが吹ふいて、波なみも高たかいのだよ。」

「なるほど、台風たいふうがききますね。」

少年しょうねんは、沖おきの方ほうを見て、茫然ぼうぜんとしていきますと、そこへ、先生せんせいが片手かたてにはこべを持って、門もんを開あけて入はいつてきました。

「おまえは？」

先生せんせいは、けげんな顔かおをして、少年しょうねんの前に立ちました。

「私は、薬くすり売りですが、この後のちごひいきにしていたただこうと上あがりました。」と、少年しょうねんは頭あたまを下げました。

「ここには、病びょう気きにかかる人ひとはいないよ。」と、先生せんせいはそつけなくいつて断ことわりました。

「でも、万まん一いちということがあります。どうか一ひと袋ふくろ置おかしていただきませす。」と、少年しょうねんはもう一度頭あたまを下げました。

「薬くすりなど置おいていかれると、病びょう気きを引き起おこすようなものだ。

「いけないからさつさと帰かえつてくれ。」と、先生せんせいは少年しょうねんをし

かりつけるようにいいました。薬くすり売りの少年しょうねんは、なるほど

がんな人ひとだと思おもいました。そして、こういう人ひとは、話はなし相あ手ても

なく独りぼっちでいて、どんなに寂しかろうと想像されたので、
 「お一人でいらしつて、お心細いことはありませんか。」と、
 少年は、いったのでした。

「なんの、さびしいことがあるものか。人の声を聞きたいと思え
 ばラジオがあるし、カナリヤは、一日じゅうこの窓でさえずつて
 いるし、ここは、前が海だから、台湾、上海、ハワイ、ど
 このラジオも手に取るように入ってくるのだ。」と、先生は、
 海原を見やって、誇らしげに語ったのです。

「ハワイからのラジオも聞こえますか？」

「夜の十時ごろには、手に取るようによく聞こえる。」
 先生は、はこべをカナリヤにやろうとして窓のところへ近づ

きました。

「あ、カナリヤの足あしから血ちが出てでいますよ。」と、薬くすり売りの少し年しょうねんは、おどろいて、叫さけびました。

「ねずみか、からすにやられたとみえる。このあたりに、悪わるいか
らすがいるからな。」

先生せんせいは、案外あんがいカナリヤの痛いた々いたしい傷きずを見ても平気へいきでした。
「かわいそうに。」

少年しょうねんは、こういつて、荷物にもつの中なかから、傷きず薬ぐすりを取り出だしました。

「おい、薬くすりなんかいらないよ。」

「いえ、お代だいをいただくのではありません。ちよつとこれをつけ

てやってください。」

少年しょうねんが、白い塗り薬ぬぐすりを出すと、

「おまえは、なかなか感心かんしんだ。」と、先生せんせいは、機嫌きげんがよかつたのです。少年しょうねんが、ここから去ろうとすると、

「お薬屋くすりやさん、また来年らいねんくるの？」と、子供こどもたちは、少年しょうねんを取りまいてききました。

「あの、桃ももの木きのある家いえへまいりますよ。」

「あ、重じゆうちゃんの家いえだ。」

子供こどもたちは、なんと思おもったか、喜よろこんで、手てをたたきました。

「もしきたら、ここへもお寄より。」と、先生せんせいが、いいました。

「みんなが、あぶないといえますから、早はやくこの家うちをお移うつしなさい

い。」と、少年しょうねんがいうと、
「はっ、はっ。」と、先生せんせいが、
笑わらいました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 11」講談社

1977（昭和52）年9月10日

1983（昭和58）年1月19日第5刷

底本の親本：「小学文学童話」竹村書房

1937（昭和12）年5月

※表題は底本では、「薬売《くすりう》りの少年《しょうねん》」
となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年9月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

薬売りの少年

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>